臨地実習における看護学生の経験と達成感との関連

井城　瑠衣[1)]，曽我　菜々美[1)]，田中　玲奈[1)]，茶山　由衣[1)]
根塚　麻弥[1)]，山岸　美幸[1)]，寺西　敬子[2)]，成瀬　優知[2)]

1）元富山県立総合衛生学院保健学科
2）富山大学

要　旨

目　的

臨地実習（実習）で看護学生が経験した場面や状況と達成感との関連について明らかにする．

方　法

富山県内の 3 年課程の看護師養成所に通う 3 年生 312 名を対象に無記名自記式アンケート調査とし，うち 304 名（有効回答率 97.4％）を分析対象とした．実習に対する達成感，22 項目設定した実習状況ごとの経験有無を分析した．

結　果

実習状況 20 項目で経験が有る者は無い者に比べて高い達成感であり，さらに 6 項目は変数減少法を用いたロジスティック回帰分析にても高い達成感との関連が明らかとなった。また，実習状況を実習場面，経験に影響する要因に分類すると，経験した実習状況の項目数が増えるほど高い達成感であることが示された．

結　論

経験する実習状況が多い程，実習の達成感が高い人の割合が高くなった．様々な実習経験を看護学生が得ることができるように看護学生自身の努力，周囲・環境の条件を整えることが必要だと考えられた．

キーワード

看護学生，達成感，実習経験，臨地実習

はじめに

臨地実習では，患者の病態や人間関係等たえず変化していく状況がある．看護学生がその状況に適応していくためには様々な困難を伴うことになる．それだけに看護学生である私達筆者らにとって，困難な状況を乗り越えることで得られた達成感は自信につながり，今後の学習意欲が引き出されることを何度も経験してきた．

実習における達成感は，原田ら[1)]は教育者の立場から「実習目標を達成し成功したという感覚」と定義している一方で，看護学生は実習における達成感について「頑張って困難な状況を乗り越えたという気持ち」と捉えている傾向があるとも述べており，教育者側と看護学生側では達成感の捉え方が異なっている．

さらに伊藤[2)]は，達成感を「ある目的・目標を達成し，成し遂げたという主観的な感覚と，それを充分であるという学生自身の内部に生じる満足感」と定義している．

そこで，看護学生である筆者らは看護学生側からみた達成感に焦点をあて，看護学生側からみた達成感と実習において経験した場面や状況との関連について検討した.

研究対象と方法

1．対象者

対象者は富山県内にある3年課程の看護師養成所の3年生312名を対象者とした．対象者のうち回答が得られた307名（回収率98.4%）において，実習の達成感と実習で経験した場面や状況についての質問項目で未回答部分を持つ3名を除いた304名を分析対象者とした（有効回答率97.4%）（表1）.

実習については，患者を受け持って看護過程の展開を行う病棟実習（病棟の種類は問わない）とし，3年次の4月から8月までに終了したものとした.

2．調査期間

2014年8月～9月とした.

3．調査方法

無記名の自記式質問紙調査法とし，調査票と学校単位の返送用封筒を学校ごとに調査者が届け，各学校の担当者が調査者から届いた調査票を学生に配布した.

表1．基本属性

(n=304)

		人数	%
年　齢	20～21歳	203	66.8
	22～29歳	44	14.5
	30～47歳	40	13.2
	不　明	17	5.6
性　別	男　性	27	8.9
	女　性	275	90.5
	不　明	2	0.7
社会人経験	な　し	234	77.0
	あ　り	66	21.7
	不　明	4	1.3
社会人経験者の経験年数			
	5年未満	12	18.1
	5年以上～10年未満	24	36.4
	10年以上～15年未満	12	18.1
	15年以上	12	18.1
	不　明	6	2.0

回収については，学校ごとの留め置き法とし，調査票記入後に記入者自身で学校ごとの返送用封筒に内容が見えないように封入し，学校ごとに返送用封筒を調査者へ送付することとした.

4．調査内容

1）属性

性別，年齢，社会人経験の有無・年数

2）実習場面や実習状況の経験程度

実習における主要な実習場面と，主要な実習場面における具体的な実習状況を設定し，実習状況の経験程度を調査した.

(1) 実習場面

先行研究[1, 3]や筆者らの経験をもとに，実習の達成感と関連していると考えられる実習を構成する主要な場面（以下，「実習場面」とする）として6場面を設定した．6場面は①患者との関わりを行う場面（以下，「患者との関わり」），②実習記録を行う場面（以下，「実習記録」），③自分自身を実習にさらに適応させていく場面（以下，「自分自身」），④実習グループメンバーとの関わりを行う場面（以下，「グループメンバーとの関わり」），⑤臨床指導者・教員との関わりを行う場面（以下，「臨床指導者・教員との関わり」），⑥既習学習を行う場面（以下，「既習学習」）とした.

(2) 実習状況と経験程度

実習場面における具体的な実習状況として22項目の状況を設定した（表2）．実習場面「患者との関わり」には4つの実習状況，実習場面「実習記録」には3つの実習状況，実習場面「グループメンバーとの関わり」には4つの実習状況，実習場面「臨床指導者・教員との関わり」には4つの実習状況，実習場面「自分自身」には4つの実習状況，実習場面「既習学習」には3つの実習状況となった.

この実習状況を質問項目とし，それぞれについて経験程度を「大いにあった」「ある程度あった」「あまりなかった」「なかった」の4件法でたずねた.

3）実習の達成感

実習の達成感（以下，「達成感」）の程度は「実習に達成感をどれくらい感じましたか.」とたず

表２．実習場面，要因，実習状況

実習場面	要因	実習状況（質問項目）
患者との関わり	混合	患者さんとコミュニケーションがうまくとれた経験はありましたか
	混合	患者さんにケアを受け入れてもらえた経験はありましたか
	自分	あなたが行ったケアで患者さんが喜んでくれたことはありましたか
	周囲・環境	受け持ち患者さんの病状が回復したという経験はありましたか
実習記録	混合	実習時間内外で記録の時間が十分にありましたか
	自分	アセスメントに必要な情報は十分に得られましたか
	自分	看護過程の展開が効率よく進められたと感じたことはありましたか
グループメンバーとの関わり	混合	あなたとグループメンバーは互いに協力したことはありましたか
	混合	グループメンバーと良好な関係を築けていましたか
	周囲・環境	あなたの気持ちをグループメンバーに共感してもらえたことはありましたか
	混合	実習の学びをグループメンバーと共有できたことはありましたか
臨床指導者・教員との関わり	自分	あなたの思いを臨床指導者ま たは教員に伝えることはできましたか
	周囲・環境	指導された内容に戸惑ったことはありましたか
	周囲・環境	あなたを支援してくれる教員または臨床指導者との出会いはありましたか
	周囲・環境	目標とする看護師との出会いはありましたか
自分自身	混合	体調を良好に保つことができましたか
	自分	必要時気分転換をはかる機会を持ちましたか
	周囲・環境	あなたの努力を実習関係者や自分の家族に認めてもらったことはありましたか
	自分	目標とする看護師のようになろうと努力したことはありましたか
既習学習	自分	自己学習が３年次の病棟実習に役立ったことはありましたか
	自分	講義や演習が３年次の病棟実習に役立ったことはありましたか
	自分	これまでの臨地実習で得た経験が３年次からの病棟実習で役立ったことはありましたか

1）実習場面：実習における主要な実習場面
2）要因：実習状況の経験程度に影響すると考えらた要因.
①「自分要因」，②「周囲・環境要因」，③「(①と②の）混合要因」
3）実習状況：臨地実習で経験する 22 の状況であり，質問項目として用いている

ね，選択肢は「大いにあった」「ある程度あった」「あまりなかった」「なかった」の 4 件法とした.

4）実習状況の経験程度に影響する要因

筆者らの実習経験から，実習状況の経験程度に影響すると考えた要因（以下,「要因」）を 3 種類設定し，22 項目の実習状況ごとにいずれかの要因を設定した.

看護学生が自分で努力することによって経験できる実習状況を①「自分要因」とし，看護学生の周囲や環境の条件によって経験できる実習状況を②「周囲・環境要因」とし，これらどちらの要因も含むものを③「混合要因」とした.

5．分析方法

1）経験程度及び達成感の回答のカテゴリー化

(1) 経験程度

具体的な実習状況別に 4 件法でたずねた経験程度は実習状況ごとに 2 つのカテゴリーに分類した.

具体的な実習状況のうち，実習場面「患者との関わり」に含まれる 4 つの実習状況については経験程度のうち「大いにあった」を『経験有』とし，それ以外を『経験無』とした.

それ以外の実習場面に含まれる 18 の実習状況については経験程度のうち「大いにあった」「ある程度あった」を『経験有』とし，それ以外を『経験無』とした.

(2) 達成感

4 件法でたずねた達成感については,「大いにあった」を『高達成感』,「ある程度あった」を『中達成感』,「あまりなかった」と「なかった」を『低達成感』と 3 つのカテゴリーに分類した.

2）分析方法

(1) 実習状況別実習経験と達成感との関連を χ 2 検定を用いて検討した.

(2) 実習場面別実習経験有無と達成感との関連性把握を目的に Kendall のタウ b を算出した. 実習場面は 3 ～ 4 項目の実習状況からなり，実習状況ごとに経験の程度をたずねている. その経験の程度で『経験有』であった実習状況の項目数を実習場面ごとに算出し，『経験有』の項目数が増えることと達成感との関連を検討した.

表３．実習状況別にみた，看護学生の実習経験と達成感との関連

実習場面	実習状況	経験	達成感			計	p 値 1)
			低達成感	中達成感	高達成感		
		計	31（10.2）	186（61.2）	87（28.6）	304（100）	
患者との関わり	患者さんとコミュニケーションがうまくとれた経験	無	24（14.8）	106（65.4）	32（19.8）	162（100）	＜ 0.001
		有	7（ 4.9）	80（56.3）	55（38.7）	142（100）	
	患者さんにケアを受け入れてもらえた経験	無	20（14.5）	90（65.2）	28（20.3）	138（100）	0.003
		有	11（ 6.6）	96（57.8）	59（35.5）	166（100）	
	あなたが行ったケアで患者さんが喜んでくれたこと	無	24（16.8）	93（65.0）	26（18.2）	143（100）	＜ 0.001
		有	7（ 4.3）	93（57.8）	61（37.9）	161（100）	
	受け持ち患者さんの病状が回復したという経験	無	28（12.6）	144（64.6）	51（22.9）	223（100）	＜ 0.001
		有	3（ 3.7）	42（51.9）	36（44.4）	81（100）	
実習記録	実習時間内外で記録の時間が十分にあったか	無	19（12.3）	96（62.3）	39（25.3）	154（100）	0.265
		有	12（ 8.0）	90（60.0）	48（32.0）	150（100）	
	アセスメントに必要な情報は十分に得られた	無	13（23.6）	37（67.3）	5（ 9.1）	55（100）	＜ 0.001
		有	18（ 7.2）	149（59.8）	82（32.9）	249（100）	
	看護過程の展開が効率よく進められた	無	28（15.9）	117（66.5）	31（17.6）	176（100）	＜ 0.001
		有	3（ 2.3）	69（53.9）	56（43.8）	128（100）	
グループメンバーとの関わり	グループメンバーと互いに協力した	無	7（36.8）	10（52.6）	2（10.5）	19（100）	＜ 0.001
		有	24（ 8.4）	176（61.8）	85（29.8）	285（100）	
	グループメンバーと良好な関係を築けた	無	4（25.0）	11（68.8）	1（ 6.3）	16（100）	0.034
		有	27（ 9.4）	175（60.8）	86（29.9）	288（100）	
	自身の気持ちをグループメンバーに共感してもらえた	無	9（36.0）	14（56.0）	2（ 8.0）	25（100）	＜ 0.001
		有	22（ 7.9）	172（61.6）	85（30.5）	279（100）	
	実習の学びをグループメンバーと共有できた	無	6（26.1）	14（60.9）	3（13.0）	23（100）	0.016
		有	25（ 8.9）	172（61.2）	84（29.9）	281（100）	
臨床指導者・教員との関わり	自身の思いを臨床指導者または教員に伝えることができた	無	16（29.1）	29（52.7）	10（18.2）	55（100）	＜ 0.001
		有	15（ 6.0）	157（63.1）	77（30.9）	249（100）	
	指導された内容に戸惑った	有	21（10.2）	132（64.1）	53（25.7）	206（100）	0.254
		無	10（10.2）	54（55.1）	34（34.7）	98（100）	
	支援してくれる教員または臨床指導者との出会いがあった	無	8（25.8）	22（71.0）	1（ 3.2）	31（100）	＜ 0.001
		有	23（ 8.4）	164（60.1）	86（31.5）	273（100）	
	目標とする看護師との出会いがあった	無	17（27.4）	41（66.1）	4（ 6.5）	62（100）	＜ 0.001
		有	14（ 5.8）	145（60.2）	82（34.0）	241（100）	
自分自身	体調を良好に保つことができた	無	9（24.3）	23（62.2）	5（13.5）	37（100）	0.003
		有	22（ 8.2）	163（61.0）	82（30.7）	267（100）	
	必要時気分転換をはかる機会を持った	無	20（16.1）	79（63.7）	25（20.2）	124（100）	0.002
		有	11（ 6.1）	107（59.4）	62（34.4）	180（100）	
	自身の努力を実習関係者や家族に認めてもらった	無	16（22.5）	45（63.4）	10（14.1）	71（100）	＜ 0.001
		有	15（ 6.4）	141（60.5）	77（33.0）	233（100）	
	目標とする看護師のようになろうと努力した	無	17（20.5）	57（68.7）	9（10.8）	83（100）	＜ 0.001
		有	14（ 6.3）	129（58.4）	78（35.3）	221（100）	
既習学習	自己学習が実習に役立った	無	9（24.3）	21（56.8）	7（18.9）	37（100）	0.008
		有	22（ 8.2）	165（61.8）	80（30.0）	267（100）	
	講義や演習が実習に役立った	無	8（33.3）	13（54.2）	3（12.5）	24（100）	＜ 0.001
		有	23（ 8.2）	173（61.8）	84（30.0）	280（100）	
	これまでの臨地実習で得た経験が実習で役立った	無	6（31.6）	13（68.4）	0（ 0.0）	19（100）	0.001
		有	25（ 8.8）	173（60.7）	87（30.5）	285（100）	

1）p 値は 2 × 3 表の χ^2 検定による
2）表内の数値は，人数（%）である
3）実習場面：実習における主要な実習場面
4）実習状況：臨地実習で経験する 22 の状況であり，質問項目として用いている

(3) 要因別実習経験と達成感との関連を Kendall のタウ b を用いて検討した．3 つの要因はそれぞれに 6 ～ 9 項目の実習状況からなり，実習状況ごとに経験の程度をたずねている．その経験の程度で『経験有』であった実習状況の項目数を要因ごとに算出し，『経験有』の項目数が増えることと達成感との関連を検討した．

(4)『高達成感』に対する実習状況の経験の関連の大きさを変数減少法を用いたロジスティック回帰分析にて検討した．

(5) 解析には SPSS17.0 を用い，有意水準は $p<0.05$ とした．

6．倫理的配慮

調査票にプライバシーを遵守し，学校名や個人は特定されないこと，調査は自由意思で調査に参加しなくても不利益が無いことを記載した．また，研究の目的以外では使用せず，調査票の提出をもって調査に同意したとみなすことを文章にて提示した．

得られた情報はパスワードをかけた記録媒体に保存し，鍵のかかった棚に保管した．さらに，研究終了後は研究対象者及び社会への還元として必要な学会発表，論文投稿，報告書作成の後に破棄する．

本研究は，富山県立総合衛生学院倫理委員会の承認を得て実施した．

結　　果

1．実習状況別にみた実習経験と達成感との関連

達成感は『高達成感』87 名（28.6%），『中達成感』186 名(61.2%)，『低達成感』31 名(10.2%)であった(表 3)．

実習状況との関連については，22 項目の実習状況のうち 20 項目の実習状況において『経験有』群は『経験無』群に比べて，『高達成感』である者の割合が有意に高かった（$p<0.05$）（表 3）．統

表４．実習場面別にみた実習状況経験項目数と高達成感者割合との関連

実習場面	項目数	中・低達成感 人数	高達成感 人数	高達成感者割合 %	Kendall のタウ b	p 値
患者との関わり	0	64	8	11.1	0.252	<0.001
	1	54	15	21.7		
	2	35	16	31.4		
	3	41	28	40.6		
	4	23	20	46.5		
実習記録	0	35	1	2.8	0.236	<0.001
	1	70	19	21.3		
	2	65	34	34.3		
	3	47	33	41.3		
グループメンバーとの関わり	0	5	0	0.0	0.147	0.001
	1	2	1	33.3		
	2	16	0	0.0		
	3	17	5	22.7		
	4	177	81	31.4		
臨床指導者・教員との関わり	0	1	0	0.0	0.166	0.001
	1	12	1	7.7		
	2	34	4	10.5		
	3	89	37	29.4		
	4	81	44	35.2		
自分自身	0	5	0	0.0	0.28	<0.001
	1	26	2	7.1		
	2	43	10	18.9		
	3	82	23	21.9		
	4	61	52	46.0		
既習学習	0	9	0	0.0	0.103	0.037
	1	13	1	7.1		
	2	17	8	32.0		
	3	178	78	30.5		

1）実習場面：実習における主要な実習場面
2）項目数：実習場面に含まれる実習状況のうち，経験有とした実習状況の項目数
3）高達成感者割合：経験有とした実習状況の項目数にあてはまる看護学生のうち高達成感者である割合．
高達成感者割合＝高達成感者 /（低達成感者 + 中達成感者 + 高達成感者）× 100

表５．要因別にみた，実習状況経験と高達成感者割合との関連

要因	項目数	中・低達成感 人数	高達成感 人数	高達成感者割合 %	Kendall のタウ b	p 値
自分要因	0	1	0	0.0	0.325	<0.001
	1	3	0	0.0		
	2	4	0	0.0		
	3	10	0	0.0		
	4	18	2	10.0		
	5	30	4	11.8		
	6	47	11	19.0		
	7	42	18	30.0		
	8	44	21	32.3		
	9	18	31	63.3		
周囲・環境要因	0	0	0	−	0.265	<0.001
	1	5	0	0.0		
	2	17	2	10.5		
	3	30	1	3.2		
	4	76	27	26.2		
	5	73	35	32.4		
	6	16	21	56.8		
混合要因	0	2	0	0.0	0.292	<0.001
	1	4	0	0.0		
	2	6	0	0.0		
	3	7	3	30.0		
	4	46	8	14.8		
	5	77	21	21.4		
	6	51	32	38.6		
	7	24	23	48.9		

1）項目数：実習場面に含まれる実習状況のうち，経験有とした実習状況の項目数
2）高達成感者割合：経験有とした実習状況の項目数にあてはまる看護学生のうち高達成感者である割合.
高達成感者割合＝高達成感者 /（低達成感者 + 中達成感者 + 高達成感者）× 100
3）要因：実習状況の経験程度に影響すると考えらた要因.
①「自分要因」，②「周囲・環境要因」，③「（①と②の）混合要因」

計学的に有意な違いがみられなかったのは「実習時間内外で記録の時間が十分にあったか」と「指導された内容に戸惑ったことはあったか」という実習状況であった.

実習状況のうち，『経験有』群が『高達成感』である割合が最も高かったのは「受け持ち患者の病状が回復した」経験であり, 44.4% を示した（表3）.

実習状況を６つの実習場面としてまとめると，『高達成感』である者の割合が最も低かったのは「グループメンバーとの関わり」であり，28.6% であった（表3）.

２．実習場面別実習経験と達成感との関連

６つの実習場面にはそれぞれ３～４項目の実習状況が含まれ，各実習場面に含まれる実習状況の『経験有』である項目数を求め，『高達成感』との関連を見た．その結果，６つの実習場面全てにおいて『経験有』である実習状況の項目数が多くなると『高達成感』である割合が有意に高くなることが示された（$p<0.05$）（表４）.

３．要因別実習経験と達成感との関連

実習状況を，３つの要因としてまとめると，３つの要因にはそれぞれ６～９項目の実習状況が含まれ，各要因に含まれる実習状況の『経験有』である項目数を求め，『高達成感』との関連を見た．その結果，３つの要因全てにおいて，『経験有』である実習状況の項目数が多くなると『高達成感』である割合が有意に高くなることが示された（$p<0.01$）（表５）.

４．『高達成感』に対する実習状況の『経験有』の関連の大きさについてオッズ比を求めたところ，有意に１より大きな値が得られたのは「受け持ち患者の病状が回復した」（$p<0.01$），「看護過程の展開が効率よく進められた」（$p<0.01$），「目標とする看護師のようになろうと努力した」（$p<0.05$）であり，その傾向がみられたのは「患

表６．『高達成感』に対する実習状況『経験有』の関連

実習場面	実習状況	オッズ比	要因
患者との関わり	患者とコミュニケーションがうまくとれた	1.69 #	混合
	患者にケアを受け入れられた		混合
	ケアで患者が喜んだ		自分
	受け持ち患者の病状が回復した	2.27 **	周囲・環境
実習記録	実習時間内外で記録の時間が十分にあった		混合
	アセスメントに必要な情報は十分に得られた		自分
	看護過程の展開が効率よく進められた	2.57 **	自分
グループメンバーとの関わり	グループメンバーと互いに協力した		混合
	グループメンバーと良好な関係を築けた		混合
	自身の気持ちをグループメンバーに共感してもらえた	3.7 #	周囲・環境
	実習の学びをグループメンバーと共有できた		混合
臨床指導者・教員との関わり	自身の思いを臨床指導者または教員に伝えることができた		自分
	指導された内容に戸惑った		周囲・環境
	支援してくれる教員または臨床指導者との出会いがあった		周囲・環境
	目標とする看護師との出会いがあった	2.84 #	周囲・環境
自分自身	体調を良好に保つことができた		混合
	必要時気分転換はかる機会を持った		自分
	自身の努力を実習関係者や家族に認めてもらった		周囲・環境
	目標とする看護師のようになろうと努力した	2.42 *	自分
既習学習	自己学習が実習に役立った		自分
	講義や演習が実習に役立った		自分
	これまでの臨地実習で得た経験が実習で役立った	－	自分

1）オッズ比：変数減少法を用いたロジスティック回帰分析にて算出
2）'－'：算出不能，#：0.05<p<0.1, *：0.01<p<0.05, **：0.001<p<0.01
3）実習場面：実習における主要な実習場面
4）実習状況：臨地実習で経験する 22 の状況であり，質問項目として用いている
5）要因：実習状況の経験程度に影響すると考えらた要因.
①「自分要因」，②「周囲・環境要因」，③「(①と②の）混合要因」

者とコミュニケーションがうまくとれた」「自身の気持ちをグループメンバーに共感してもらえた」「目標とする看護師との出会いがあった」（いずれも p<0.1）であった（表 6）.

考　　察

１．実習状況と達成感について

実習における実習状況では今回設定した 22 項目の状況中 20 項目で実習状況を経験した学生は経験しなかった学生に比べて高い達成感を得ていることが明らかになった.

実習における場面や状況についての質問は，原田ら[1]の先行研究を参考にしながら看護学生である筆者らの実習経験に基づいて作成したことが影響していると考えられるものの，今回の結果は筆者らが実習を通じて得た，実習状況の経験と達成感の高さの関係と類似し，違和感がない.

実習場面「実習記録」は 3 つの実習状況として「実習時間内外で記録の時間が十分にあった」「アセスメントに必要な情報は十分に得られた」「看護過程の展開が効率よく進められた」からなる. これら 3 つの実習状況のうち「看護過程の展開が効率よく進められた」経験のみが高い達成感に関連していた. これは時間がない中でも看護学生自身が納得できる質の高い看護過程の展開ができることが達成感を高めているのではないかと考えられる.

実習場面「臨床指導者・教員との関わり」については筆者らが研究実施にあたり自分達の実習を振り返った際に「指導者からの指導内容に戸惑いを感じずにすむことは指導内容をスムーズに理解することにつながり，結果として高い達成感になるだろう」と考えていた. しかし，本研究の結果では「指導された内容に戸惑った」という実習状況において戸惑った経験の有無によって，高い達

成感である者の割合に有意な違いはみられなかった．一方で「自身の思いを臨床指導者または教員に伝えることができた」という，実習状況において伝えることができた経験が有った者は経験が無かった者に比べて高い達成感を得ていた．また，原田ら[1]は，患者の状態を適切にアセスメントすることには指導者からの助言が必要であるとしている．つまり，実習においては指導者の助言は重要であり，学生にとって戸惑う指導内容であっても，学生自身が理解しようと自分の思いを指導者や教員に伝え，戸惑いを解決していく行動をとることができる学生は高い達成感を得ることができるのだろうと考えられた．

２．実習場面と達成感について

６つの実習場面それぞれには３～４つの実習状況が含まれている．各実習場面に含まれる実習状況のうちいくつの実習状況で経験があったかと達成感との関連を見てみると，全ての実習場面で経験が有った実習状況の項目数が増えると高い達成感である割合も有意に高いと示された．しかし，実習場面「グループメンバーとの関わり」については，有意な結果ではあったものの，経験が有った実習状況の項目数が増えるごとにというなだらかな上昇は，示された数値から感覚的には捉えることができない．これは高い達成感であった学生のほぼ全員の経験が有った実習状況の項目数がこの実習場面の最大項目数である４つであったことが影響している．徐々に割合が高まるということが目で見てわかるという結果ではないが，一方で高い達成感を持つには「グループメンバーとの関わり」の各実習状況が一つも欠かすことができないほど重要な経験であるとも考えられた．

３．要因と達成感との関連について

看護学生である筆者らは自分達の経験から，学生自身の行動によって経験できる実習状況は，環境や周囲の条件によって経験の有無が影響される実習状況よりも高い達成感になりやすいと考えていた．しかし，実習状況の経験の有無に影響すると考えられる要因を「自分要因」「周囲･環境要因」「混合要因」の３つとし，要因別にその要因に含まれる，経験が有った実習状況の項目数と達成感の高さとの関連をみたところ，「自分要因」だけではなく「周囲・環境要因」「混合要因」いずれにおいても経験した実習状況の項目数が多くなるほど高い達成感であることが示された．筆者らが考えていた「自分要因」が際立って重要というわけではなく，自分自身の努力はもちろん必要であるが，周囲や環境の条件によっても実習経験が増え，高い達成感につながっていることが示されたと考えられる．

４．『高達成感』に対する実習状況の経験の関連の大きさについて

実習状況の経験を持つことが高い達成感にどれくらい関連しているかをみたところ，６つの実習状況の経験が関連していることが明らかとなった．

これらのうち，「患者とコミュニケーションがうまくとれた」「看護過程の展開が効率よく進められた」という実習状況は，看護学生にとってほとんどの場合に一つの病棟では一人だけを担当する，受け持ち患者との関係の重要性が示されたと考えられる．つまり，受け持ち患者とのコミュニケーションをうまくとることができれば，信頼関係の構築につながり，患者の心身の状況のより確実な把握・アセスメントにつながる．このことは看護過程の展開を効率よく進めることになり，その結果として患者に合ったケアを提供でき，高い達成感となったのではないかと考えられるからである．また，看護学生にとって看護過程の展開は実習の課題である実習記録の大半を占めており，看護過程の展開が効率よく進むということは実習全体を順調に進めることができていると看護学生自身が実感しやすい．このことから高い達成感となった可能性も考えられる．

「受け持ち患者の病状が回復した」という実習状況の経験が高い達成感と関連していたことについては，看護学生にとって毎日関わって毎日考え続けている受け持ち患者の病状回復は看護学生自身が行ったケアが回復の一部につながったのではないだろうかと感じることができ，達成感を高めたのではないかと考えられた．

「目標とする看護師との出会いがあった」「目標とする看護師のようになろうと努力した」という実習状況の経験を持つことも高い達成感と関連していた．目標にしたくなるような看護師に出会え

たことで，具体的な目標が明確になり，看護学生の実習に対するやる気の向上につながった可能性がある．そして「目標とする看護師のようになろうと努力」することは，努力する自分，頑張った自分を実感しやすいともいえる．これらによって高い達成感につながったと考えられる．

結　語

1．実習の達成感が高い学生（「大いにあった」と「ある程度あった」）は 89．8% であった．
2．22 項目設定した実習状況のうち 20 項目で実習状況の経験があることと高い達成感との関連がみられた．
3．実習状況を 6 つに分類した実習場面では，経験があった実習状況の個数が多い程，高い達成感である割合も高かった．
4．実習状況の経験に影響する要因として設定した 3 つの要因全てにおいて，経験があった実習状況の個数が多い程，高い達成感である割合も高かった．
5．高い達成感に関連していた実習状況の経験が明らかとなった．これらの経験が得られるように看護学生自身の努力，周囲・環境の条件を整えることを行うことで，看護学生の高い達成感につながる可能性が示唆された．

謝　辞

本研究を行うにあたり，アンケート調査にご協力をいただきました看護師養成所の皆様に深く感謝いたします．

文　献

1）原田秀子，張替直美，中谷信江ほか : 臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討（第 2 報）－成人看護学実習Ⅱ（クリティカルケア実習）終了後の調査を通して－．山口県立大学看護学部紀要第 9 号：49–56，2005.

2）伊藤洋子 : 基礎看護学実習Ⅱにおける学習の達成感 －人的環境の視点からの一考察－．飯田女子短期大学紀要第 21 集：153–165，2004.

3）原田秀子 : 臨地実習における学生の達成感に影響する要因の分析（第 3 報）－ 4 年次学生に対しての縦断調査を通して－．山口県立大学看護学部紀要第 10 号：29–37，2006.

Relation between the experiences and the sense of accomplishment of student nurses in the clinical trainings.

Rui IKI[1)] , Nanami SOGA[1)], Rena TANAKA[1)], Yui CHAYAMA[1)], Maya NEDUKA[1)]
Miyuki YAMAGISHI[1)], Keiko TERANISHI[2)], Yuchi NARUSE[2)]

1) The former Toyama Prefectural School of Nursing, Midwifery and Public Health, Department of Public Health
2) University of Toyama

Abstract

Objects
An object was to clarify a relation between the experiences and the sense of accomplishment of student nurses in the clinical trainings.

Method
A self-administered questionnaire survey was conducted targeting 312 third-graders of the three-year course in nursing schools in Toyama, with a valid response rate of 97.4 percent. We examined the sense of accomplishment and experiences on twenty-two scenes or situations in the trainings, and analyzed these relationships.

Results
Regarding twenty scenes or situations in the trainings, a positive relationship between the experience and sense of accomplishment was recognized, and the experience of six items related high sense of accomplishment by multiple logistic analysis. In all scenes or situations, as the number of experiences increased, the ratio of the high sense of accomplishment increased. After all scenes or situations categorization into three factor groups, the same result was seen.

Conclusion
The ratio of the students with the high sense of accomplishment rose as the number of experiences in the scenes or situations in the clinical trainings increased. It is important to prepare environment beneficial for student nurses to gain a great deal of experience in the clinical trainings because various experiences influence improving the sense of accomplishment.

Keywords:

student nurse, sense of accomplishment, experiences, clinical trainings